

推 薦 書

ふりがな 氏名 (年齢)	やすなが たくお 安永 卓生 (60歳)
現職 (前職)	九州工業大学・理事／副学長 ()
推薦理由	<p>候補者は、大学を取り巻く複合的な危機を多面的かつ冷静に見極め、「大学運営そのもののイノベーション」によってその危機を成長機会へと転換しようとする強い覚悟と戦略性を備えています。</p> <p>教育・研究・経営の全領域にわたるDX投資を軸に、次世代の産業と社会を牽引する大学へと導く構想は、Kyutech Vision 2040の具現化に最もふさわしいものです。</p> <p>勇気と知性、経験と実績、そして、未来を描く創造力を兼ね備えたリーダーとして、強く推薦いたします。</p>

国立大学法人九州工業大学学長選考・監察会議議長 殿

九州工業大学学長候補適任者として、上記の者を推薦します。

2025年6月26日

推薦人（代表）中基 隆

所属（職名）情報工学研究院知的システム工学研究系
教授

氏名（自署）中基 隆



- (注1) 年齢は、2025年5月1日現在の年齢を記載してください。（以下の各様式において同じ。）
- (注2) 現職がない場合は、同欄の（ ）内に直近の前職を記載してください。（以下の各様式において同じ。）
- (注3) この推薦書と併せて、別紙様式第5号を提出してください。
- (注4) この推薦書は、公表の対象となります。
- (注5) 推薦人が推薦できる学長候補適任者は、1人に限ります。
- (注6) 学長候補適任者の推薦に当たり、自薦は認めません。

公表用

略 歴 書

氏 名	安永卓生	(写真貼付欄)
年 齢	60 歳	
年 月	学 歴	
1988/03	東京大学・理学部物理学科 卒業	
1990/03	同大学・大学院理学系研究科物理学専攻・修士課程修了	
1992/09	同大学・大学院理学系研究科物理学専攻・博士課程 中退	
年 月	学 位	
2001/05	東京大学 博士（理学）取得	
年 月	主 な 職 歴	
1992/10	東京大学・理学部・物理学科 助手	
2001/11	九州工業大学・情報工学部・生物化学システム工学科 助教授	
2008/04	同大学・大学院情報工学研究院・生命情報工学研究系 教授 現在は兼任	
2022/04	同大学・理事／副学長 現在に至る	
年 月	教育・研究及び職務に関する主な業績	
2011/04	実践的な問題発見・解決型の大学院教育を目的とした「需要創発コース」を設置	
2016/05	糸状仮足形成メカニズムの提案(Cytoskeleton;	
2024/05	https://doi.org/10.1002/cm.21309	
2024/04	JIS K0200:2024 計測分析装置の分析データ共通フォーマット主たる執筆者 九工大 100%出資特別目的会社 Kyutech ARISE の企業	
年 月	主な社会貢献活動、教育・研究及び職務に関する主な受賞歴	
2013/10	飯塚市・教育委員会 教育委員 現在に至る	
2024/09	入試学会・理事 現在に至る	
2014/10	日本学術振興会・研究開発専門委員会・幹事	
2018/04	日本学術振興会・産学協力研究委員会・幹事 (C193(2018/4-	
2020/04	23/3), R053(2024/4-現在))	
	日本顕微鏡学会・理事(2020-2021年度)	

- (注1) この略歴書は、公表の対象となります。
- (注2) 記載にあたっては、別紙様式2号の1の記載内容のうちから、主要なものを記載してください。
- (注3) 本様式への記載にあたっては、10.5ポイント以上のフォントを使用してください。

所 信 表 明 書

学長候補適任者 の職・氏名	現職:九州工業大学・理事/副学長 (前職:)	ふりがな やすなりたくあ 氏名: 安永卓生 (自署) 
<p>(所信)</p> <p>九州工業大学は開学以来、「日本の産業を支えるエンジニアを輩出すること」を使命として歩んできた。さらに Kyutech Vision 2040 では、「未来を思考するモノづくりとひとづくりで世界にインパクトを与える」——〈Impact the Next Industry〉——を掲げている。実際、このビジョンに繋がる潜在力を十分備えている。しかし現在、三つの危機が顕在化している。</p> <p>① 旧来型組織と手法が限界に達した。紙文化・重複業務が人的コストを増大させ疲弊を招いている。</p> <p>② Society 5.0 と VUCA の激変に教育・研究基盤の整備が追いつかず、俊敏性が欠けている。</p> <p>③ 少子化による母集団減少が進み、学生獲得の困難化による大学の負担が増加している。</p> <p>本学が「選ばれ続けるイノベーション創出大学」として危機を成長機会へ転換する鍵は、大学運営そのもののイノベーションとそれに伴う教職員・学生を含めたステークホルダーの働きがいの促進である。</p> <p>運営交付金の減少と人件費の上昇は、教育研究基盤とバックオフィスを着実に圧迫している。一方、教職員の努力により外部資金と間接経費は伸長し、SI 事業や J-PEAKS の大型資金も確保した。当面の資金繰りは可能である。今こそ、基金を積み増し、間接経費を教育研究を支える業務への DX 投資へ充当する好機である。安全安心な情報基盤を確立し、IR ダッシュボードなどで意思決定を透明化しつつ、4年で業務を 30% 削減(下述)する。基金の積み増しと外部資金多様化を両輪に、「稼ぐ大学」体質を確立する。</p> <p>また、高校探究の深化、教科「情報」必修化、国語教科の新展開など初等中等教育は大転換期を迎え、DXの進展に伴い産業界が求める学士力も急速に変化している。本学のカリキュラムがこうした潮流に即応しているか、早急に総点検しなければならない。</p> <p>1. 教育の継続的改善</p> <p>「JABEE が掲げる継続的改善(GQI)を軸に工学教育を再定義し、全学で改善・刷新サイクル(PDCA)を回す」ための体制を整備する。これにより学生の社会的価値を高め、学生の本学満足度を向上させる。</p> <p>① R8 年度改組(1 学部 1 学科+主/副プログラム)を起点に、教育の情報を全学で集約する。全学統一のプログラム保証・改善・開発体制、及び情報基盤を整備する。これにより継続的な学部・大学院教育の見直しを図る。</p> <p>② 入学者選抜、カリキュラム改革、継続的な広報活動により、女子学生比率 25%以上(現 19%)、留学生増加、社会人学生/リスクリング学生の増加と多様なバックグラウンドをもつ学生の確保を図る。</p> <p>③ 国内外・産業界との連携教育を拡充する。オープンマインド(共修、協働)の醸成と大学院進学・社会人修士/博士、社会人リスクリングなどによるエンジニアの高度化を促進し、学修経路を多層化する。</p> <p>④ 学生・教職員 IR ダッシュボードで、データ駆動の学生の学修モデルを提示し指導する。カリキュラム更新を行い、ジェンダー・入学者選抜・狭義の学歴などのアンコンシャス・バイアスを回避する。</p>		

これらにより、〈自律・自立・自主〉を育む多様性エコシステムを整備し、イノベーション創出人材を持続的に輩出する。また、中長期的な学部/大学院定員比等を見直し、少子化時代の大学の価値を高める。

2. 研究の場としての大学

ビジョン 2040 は、「DeepTech × 社会実装」掲げる。J-PEAKS の中心的研究テーマ、重点研究センターなどを核に、研究大学としての「研究の場」の構築を行う。J-PEAKS の KPI に対応し、2029 年度に、世界 Top 10%被引用論文数の 20%増、PARKS を活用し大学発スタートアップを 4 年間 40 件を目標とする。教職員が外部資金として「競争的資金」などの獲得を推奨し、当該研究分野の拡がりに繋げる。ファンド及びバックオフィスの運営支援を確保するため間接経費 30%の意図を徹底、活用を図る。

- ① 研究時間創出：教員一人当たりの研究時間を年間 200 時間(1 日 1 時間)増やす。教員の事務工数(時間)を 30%削減により、その実現を目指す。大学運営のデジタル変革、並びに教育負担の標準化、業務(委員会等)などの精査を進め、デジタライゼーションを進める。
- ② 研究資金基盤：URA と連携し、既存のブリッジファンド/シードファンドを充実し、研究立ち上げ期及び研究費の揺らぎによる研究のクライシスを防ぐためのセーフティネットを保障する。
- ③ 教育による社会連携：リスキリング講座や STEAM Outreach を研究成果と結び付け、「面」で社会へ価値を還元する。さらに、それらの教育価値に対する対価とインセンティブを明確化する。女性・留学生・研究者を含む多様性のチームを促進し、オープン&グローバルな学びのイノベーション・エコシステムを形成する。

3. 大学運営の変革

大学運営のデジタル変革(DX)と透明化は待ったなしである。部局・課ごとに孤立したレガシーシステムとサイロ化データは、経営判断に必須の「情報・知識・知恵」の生成を阻害し、人的コストを膨張させ、業務目的・工数の不透明が教職員の疲弊に繋がる。J-PEAKS 戦略でも経営 DX が必須である。そこで、

- ① 安全・安心な統合データレイクと自動データ生成基盤を整備し、全ステークホルダーがリアルタイムに情報へアクセスできる環境を、J-PEAKS、外部資金の間接経費を最大限活用して、構築する。
- ② 「二度目以降は自動化」を合言葉に業務を標準化・棚卸・計測し、RPA・ワークフロー・生成 AI を適用する。承認手続は電子決裁、出納業務は電子決済とし、工数を可視化する。4 年間で工数・費用を 30% 削減する。浮いた時間を研究・教育・ガバナンスに充て、「ほぼリアルタイム経営」を実現する。
- ③ 成果は IR ダッシュボードで公開し運営透明性を担保する。このプロセスを 企画 (P: 2-6 年) → 運営 (C/A: 半期~年度) → 運用 (D/A: 日次) で着実に回す。組織および各構成員の MBO(目標管理)を活用、構成員の能力向上の機会を増やし、問題/課題を解決する大学運営を目指す。

これらを通して、全教職員学生それぞれステークホルダーの九工大の推奨度(eNPS)の向上を目指す。

4. 大学広報の改善

元来より本学の教育・研究・社会貢献は他大学を凌駕する実績を誇る。この強みを持続的に可視化するため、組織横断で教職員個々の発信を体系的・セキュアに統合し、多言語広報基盤を構築する。これにより、九工大の総合力を一層力強く世界へ発信していく所存である。

以上の取組により、九州工業大学を、「挑戦者が挑戦者を呼ぶプラットフォーム」へ進化させる。危機を恐れず、データと対話で課題を解決し、未来を創る当事者として次の産業を牽引していく。

(注1)この所信表明書は、公表の対象となります。

(注2)所信欄は、九州工業大学の将来構想、教育・研究・社会貢献・国際貢献、大学運営等に関し、2,000 字程度以内で記載してください。

推薦人名簿

	ふりがな 氏名 (自署)	所属・職名	押印欄
推薦人代表	なか ぐさ たかし 中 菱 隆	情報工学研究院 知的システム工学研究系 教授	
	か とう ねいこ 加 藤 鏡子	教養教育院 人文社会系 教授	
	なす い ぶい かつ 寿 井 慶和	情報工学研究院 物理情報工学研究系 教授	
	つばい のぶゆき 坪 井 伸幸	工学研究院 機械知能工学研究系, 教授	
	なかむら ゆたか 中 村 豊	情報基盤センター 教授	
	お だ べ ぞうじ 小 田 部 荘司	情報工学研究院 物理情報工学研究系 教授	
	やすだ りつし 安 田 隆	生命体工学研究科 生体機能応用工学専攻 教授	
	いの うえ ぞうぞう 井 上 創造	生命体工学研究科 人間知能システム工学専攻 教授	
	よし だ かつら 吉 田 香	生命体工学研究科 人間知能システム工学専攻 教授	
	たかす とみ お 高 須 登 良 男	工学研究院 物質工学研究系 教授	

(注) この推薦人名簿は、公表の対象となります。